

パーキンソン病療養の手引きの改訂

研究分担者 高橋良輔 京都大学医学研究科臨床神経学・教授

共同研究者 渡邊宏久¹⁾、野村哲志²⁾、前田哲也³⁾、馬場康彦⁴⁾、下畑享良⁵⁾、斎木英資⁶⁾、
栗崎玲一⁷⁾、澤本伸克⁸⁾、平野成樹⁹⁾、金子鋭¹⁰⁾、西川典子¹¹⁾、高橋牧郎¹²⁾、下泰司¹³⁾、
服部信孝¹³⁾、山本敏之¹⁴⁾、大江田知子¹⁵⁾、高橋一司¹⁶⁾、柏原健一¹⁷⁾、山門穂高¹⁸⁾、
中島健二²⁾、野元正弘¹¹⁾、長谷川一子¹⁹⁾
名古屋大学脳とこころの研究センター・神経内科¹⁾、
鳥取大学脳神経内科²⁾、岩手医科大学神経内科・老年科分野³⁾、
東海大学神経内科学⁴⁾、新潟大学脳研究所神経内科⁵⁾、北野病院神経内科⁶⁾、
NHO 熊本再春荘病院神経内科⁷⁾、京都大学人間健康科学⁸⁾、千葉大学神経内科⁹⁾、
関西医科大学神経内科¹⁰⁾、愛媛大学薬物療法・神経内科学¹¹⁾、大阪赤十字病院神経内科¹²⁾、
順天堂大学脳神経内科¹³⁾、国立精神・神経医療研究センター病院神経内科¹⁴⁾、
NHO 宇多野病院神経内科¹⁵⁾、埼玉医科大学神経内科¹⁶⁾、岡山旭東病院神経内科¹⁷⁾、
京都大学神経内科¹⁸⁾、NHO 相模原病院神経内科¹⁹⁾

研究要旨

「パーキンソン病と関連疾患（進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症）の療養の手引き」が、「神経変性疾患に関する調査研究班」（主任研究者 葛原茂樹）の事業として平成 17 年に発行され、現在まで広く活用されてきた。しかし、発行後約 10 年が経過し、この間に非運動症状が注目されて多くの知見が集積され、治療についても顕著な進歩があった。こうした背景から、本研究班の事業として改訂版を作成することとなった。神経変性班内外の中堅・若手の専門家を中心にご協力、ご執筆をいただき、Q&A 形式の構成でイラスト・図を多用し、患者・介護者の立場に立った工夫された原稿をいただいた。今年度は用語や表現の全体の統一、イラストの追加などを進めた。現在、改訂版の「パーキンソン病の療養の手引き」は、「神経変性疾患領域における基盤的調査研究班」（中島班）のホームページからダウンロード可能となっている。今後は多くの方々へ提供してご意見をいただき、表現や用語をより親しみやすく、よりわかりやすいものとすべく改訂を重ねたい。

A. 研究目的

「パーキンソン病と関連疾患（進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症）の療養の手引き」は平成 17 年 3 月、当時の厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業「神経変性疾患に関する調査研究班」（主任研究者 葛原茂樹）の事業として作成された。親しみやすい Q&A 形式で構成され、多くのイラストと大きな字による平易・簡潔な記載

で、一般の方にも読みやすい工夫がされている。この手引きは、「神経変性疾患領域における基盤的調査研究班」（中島班）のホームページ（<http://plaza.umin.ac.jp/~neuro2/index.html>）からダウンロードすることが可能となっている。

現在まで、病気に関するわかりやすい手引き書（本文 75 ページ）として広く活用されてきたが、

発行後約 10 年が経過した。この間に、病態理解については、生活の質に大きな影響を与える因子として自律神経障害、睡眠障害、精神症状、認知機能障害等の非運動症状が注目されて多くの知見が集積された。また、治療についても、ドパミンアゴニストの選択肢が増え、手術療法も進歩した。こうした背景から、本研究班の事業として改訂版を作成することになった。

B.研究方法

形式は平成 17 年度版を踏襲して、Q&A 形式で構成し、イラスト・図を多用して、患者・介護者の立場に立ったわかりやすい記載を目指すこととした。前回の療養の手引き作成以降の診療の進歩に対応するため、改訂版には非運動症状と新しい治療選択肢についての記載を加えることとした。

今年度は、用語や表現の全体の統一、イラストの追加などを進めた。

C.研究結果

神経変性班内外の中堅・若手の専門家を中心にご協力、ご執筆をいただき、多くの患者さんやご家族に活用いただけるよう平易・簡潔に記載された原稿を、以下の内容でいただいた(敬称略)。

【目次】

- | | |
|-----------|----------------|
| 1. 総論 | [京大: 高橋 良輔] |
| 2. 臨床症状 | |
| 運動症状 | [京大: 高橋 良輔] |
| 非運動症状 | |
| 自律神経症状 | [名大: 渡邊 宏久] |
| 睡眠障害 | [鳥取大: 野村 哲志] |
| 精神症状/認知障害 | [岩手大: 前田 哲志] |
| | [福岡大: 馬場 康彦] |
| 疼痛/感覚障害 | [新潟大: 下畑 享良] |
| 治療の運動合併症 | [北野: 斎木 英資] |
| 合併する身体疾患 | [熊本再春荘: 栗崎 玲一] |
| 3. 診断 | |
| 診断/検査 | [京大: 澤本 伸克] |
| 鑑別診断 | [千葉大: 平野 成樹] |

4. 経過 [関西医大: 金子 鋭]

5. 治療

 運動症状

 早期治療/選択薬 [愛媛大: 西川 典子]

 進行期治療 [大阪日赤: 高橋 牧郎]

 外科的治療 [順天堂: 下 泰司/服部信孝]

 リハビリテーション

[国立精神神経セ: 山本 敏之]

 非運動症状

 自律神経症状 [名大: 渡邊 宏久]

 睡眠障害 [鳥取大: 野村 哲志]

 精神症状/認知障害 [秋田脳: 前田 哲志]

[福岡大: 馬場 康彦]

 疼痛/感覚障害 [新潟大: 下畑 享良]

6. 日常生活における注意

 運転/転倒予防など [宇多野: 大江田 知子]

 自律神経症状など [埼玉医大: 高橋 一司]

7. 患者・家族への支援 [岡山旭東: 柏原 健一]

8. 開発中の診断/治療法 [京大: 山門 穂高]

D.考察

用語については、原則的に「神経学用語集 改訂第 3 版」に従った。しかし、例えば「dopamine agonist」の和訳は、「神経学用語集」では「ドパミン作動薬」であるが、一般的には「ドパミンアゴニスト」が使われることが多く、非専門家向けの手引きであることを考慮して後者を選択した。また、pathological gambling (病的賭博)、hypersexuality (性欲亢進)など「神経学用語集」に記載がない用語は、「パーキンソン病ガイドライン 2011」に従った。

E.結論

「パーキンソン病と関連疾患(進行性核上性麻痺・大脳皮質基底核変性症)の療養の手引き」が平成 17 年に発行され、現在まで広く活用されてきた。しかし、発行後約 10 年が経過したことから、神経変性班内外の中堅・若手の専門家を中心にご協力、ご執筆をいただき、本研究班の事業と

して改訂版を作成した。今後は多くの方々に提供
してご意見をいただき、表現や用語をより親しみ
やすく、よりわかりやすいものとするべく改訂を重
ねたい。

F.健康危険情報

該当なし

G.研究発表

1. 論文発表

- 1.高橋良輔・研究分担者『パーキンソン病の療養
の手引き』(2016年12月) [「神経変性疾患領
域における基盤的調査研究班」(中島班)のホー
ム ペ ー ジ
([http://plaza.umin.ac.jp/~neuro2/index.ht
ml](http://plaza.umin.ac.jp/~neuro2/index.html)) からダウンロード可能]
- 2.樽野陽亮、高橋良輔「パーキンソン病の治療」
Medical Practice 第33巻臨時増刊号『最新の
ガイドラインを生かした日常内科診療 - その充
実とレベルアップを目指して - 』、154 - 160、
2016

2.学会発表

該当なし

H.知的所有権の取得状況(予定を含む)

1.特許取得

該当なし

2.実用新案登録

該当なし

3.その他

該当なし